

肥前東部地域における古墳時代前期・中期の埋葬施設

重藤輝行

一、はじめに

九州における古墳時代の古墳等に見られる埋葬施設は地域、時期によって多様な型式が採用される。埋葬施設の中には九州に集中して分布する装飾古墳、他地域に先駆けて出現、普及した初期横穴式石室などの特徴的なものもある。また、そこには九州内はもちろん列島各地、朝鮮半島との間の地域間関係が反映されている。そのため、早くから九州の地域性を示すものとして注目され、編年、地域性をはじめとする諸問題に関する多くの研究の蓄積がある。

本稿で取り上げる佐賀県地域の古墳時代埋葬施設については、田平徳栄氏による古墳時代前期の埋葬施設に関する研究（田平一九八九）がある。また、横穴式石室については、小松讓氏が中期に属する初期横穴式石室も含めてまとめている（小松一九九八）。これらの研究の発表の後、さらに資料の増加が進むとともに、古墳の時期決定にも影響を与える在地の土器編年も整備されることとなった。また、筆者も古墳時代前期～中期の筑前・筑後・豊前北部地域の埋葬施設の検討を進めている。ここではこのような先行研究と資料の充実を承けて、古墳時代前期～中期の佐賀県地域における埋葬施設の変遷について論ずることとした。

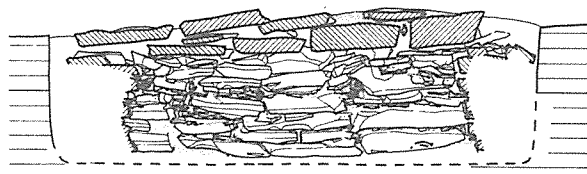
なお、本稿と関連する古墳時代前期～中期の北部九州における埋葬施設の研究史については、概略ながら別稿（重藤・西一九九五）でまとめたことがある。筆者の古墳埋葬施設の研究に関する問題意識も述べているので、御参照いただきたい。

二、方法とデータ

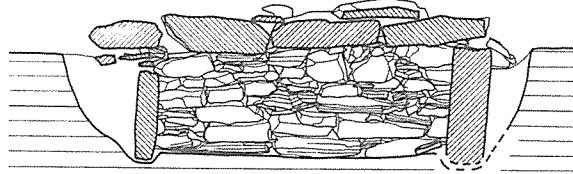
(一) 取り上げる埋葬施設の種類

古墳時代前期の北部九州では、割竹形木棺あるいは組合式木棺の直葬、箱式石棺が前方後円墳、前方後方墳等大形古墳の主体部となる例も少なくない。また、吉留秀敏氏によれば、北部九州における古墳時代前期の埋葬施設は、縦穴式石室に割竹形木棺を納めたものを頂点とし、割竹形木棺直葬がこれに次ぐという階層的関係にあるとされる（吉留一九九〇）。ただ、古墳時代中期になると木棺の直葬、箱式石棺は中小の円墳・方墳等に限られるようである（重藤・西一九九五）。一方、古墳時代中期後半の北部九州では初期横穴式石室が首長墓はもちろん、中小の古墳にも普及し、古墳時代後期になると横穴式石室が群集墳でも中心的な埋葬施設となる。

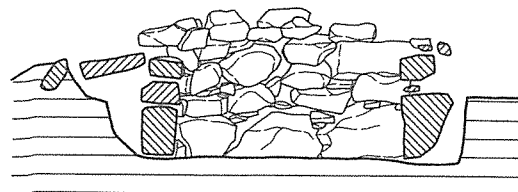
古墳埋葬施設については副葬品の豊富な前方後円墳等の首長墓級の大型古墳に注目があつまることが多いが、その他の古墳の状況も古墳時代の地



1. 石棺系竪穴式石室1式；佐賀市久保泉丸山 ST006（短壁、長壁とも最下段から板石を小口積み）



2. 石棺系竪穴式石室2式；佐賀市久保泉丸山 ST007（短壁の最下段にのみ板石を設置）



3. 石棺系竪穴式石室3式；吉野ヶ里町浦田2区 ST022（短壁、長壁の最下段に板石、大形の塊石を設置）

0 2 m

図1 石棺系竪穴式石室の細分（各報告書から転載）

域社会を考えるためには欠くことができない。各種の埋葬施設も含め、その消長を地域毎に跡付け、さらにどのような階層にそれぞれの埋葬施設が採用されたかを考えることが、古墳時代における地域性の理解のためには必要となる。そこで、ここでは首長墓級の古墳に限らず、中小の円墳・方墳、墳丘の不明なものまで含めて、古墳時代前期～中期にどのような埋葬施設が用いられ、どのように変遷したかをみることにしたい。

以上のような観点から、ここでは古墳時代前期～中期の佐賀県内、肥前東部地域に存在する次のような埋葬施設について検討を行った。

石棺系竪穴式石室 石棺系竪穴式石室は、古墳時代前期の竪穴式石室と同様の構築技法で壁体をつくるが、最大の相違点は木棺を使用せずに、箱式石棺と同様に直葬することである。石棺系竪穴式石室と呼ぶのもそのためである。

この石棺系竪穴式石室に対して、中間研志氏（一九八六）は福岡県朝倉市柿原古墳群の例を中心として、基底部、平面形に注目して分類し、編年に論及している。対象資料では平面プランの変異はそれほど抽出できないので、中間氏の述べる基底部の変遷を参考に、四壁とも基底部から割石小口積みする1式（図1の1）、小口部のみ板石をたてる2式（図1の2）、四壁とも基底部に板石をたてる3式（図1の3）に分類した。この順番での変化を想定するが、田平氏もほぼ同様の見解である。これについては共伴する土器等から、その前後関係や時間的位置づけを再確認することにしてい。

割竹形木棺の直葬 墓壙底横断面が半円形、あるいは曲線をなす刳拔式木棺をこれにあて、粘土槨、割竹形木棺直葬の両者をここに含める。本稿では細分しないが、純粋な割竹形木棺とそれ以外の木棺の差、規模における格差の存在も指摘されている（吉留一九八九）。被覆粘土や礫床をもつものもここに含めるものとする。なお、舟形木棺と称すべきものもあるが、刳拔式の木棺としてここに含めた。

組合式木棺の直葬 板材を箱状に組み合わせた木棺を直葬するもの。まれに礫床、板石の蓋を持つ例がある。

箱式石棺 弥生時代以来の伝統的な埋葬施設である。まれに、丁寧な調整で石材表面を平滑に加工し、蓋などに突起を持つものもあるが、区別しがたいものも多いので本稿では一括している。

土壙墓 木蓋と考えられる素掘り土壙墓である。

石蓋土壙墓 素掘りの土壙墓に石蓋を伴うもの。

壺棺 壺等の土器を用いた埋葬施設で、小児の埋葬として採用される例が多い。

表1 本稿で用いる土師による時期区分と古墳編年・絶対年代

古墳時代の3期区分	『前方後円墳集成』編年	重藤2009土師器編年	蒲原1991土師器編年	小松2003土師器編年	田辺1981須恵器編年	実年代
前期	1期	I期	タケ里式			300年
			土師本村1式			
	2期	II期	土師本村2式			
中期	3期	III A期	土師本村3式	梅白遺跡3 A期	TK73 TK216 TK208 TK23 TK47 MT15 TK10 MT85 TK43 TK209	400年
	4期		III B期	梅白遺跡3 B期		
	5期	IV期		梅白遺跡4期		500年
	6期					
	7期	V期				
8期	VI期			600年		
9期						
後期	10期	VII期				

初期横穴式石室A類 大型の初期横穴式石室で、玄室幅一・五m以上をおよその目安とすることとした。本地域には北部九州型初期横穴式石室に加えて、肥後型と北部九州型の折衷的な形態をとる「筑肥型初期横穴式石室」が集中しているが(柳沢一九九三)、ここでは北部九州型と一括するこ

ととした。

初期横穴式石室B類 初期横穴式石室A類に含まれない、狭長な玄室の初期横穴式石室である。

件数の少ない竪穴式石室内に木棺・石棺を埋置した埋葬施設、舟形石棺、長持形石棺等の例は主たる分析の対象としてはしていないが、重要なものも多い。そこで、データを収集の上、補足的に述べることにした。

なお、筆者は本稿と同様の検討を他地域で行ったことがあるが(重藤・西一九九五、重藤二〇〇七)、その際は階層差を的確に把握できるように成人用の埋葬施設のみを対象とし、小児用の埋葬施設は除外した。しかし、本稿では小児用の埋葬施設の割合、時期等を考えてみるために、あわせて検討することとした。

(二) 対象とする時間幅と時期区分について

ここで取り扱う古墳は副葬品の少ない小規模なものまで含むとともに、箱式石棺・石棺系竪穴式石室・初期横穴式石室では盗掘、攪乱の影響を受けたものも多い。そのため、『前方後円墳集成』編年(近藤編一九九二)のような副葬品の組合せに基づいた時期区分は適用しにくい。そこで、古墳の周溝や、石室内等から断片的な形であっても出土することの多い土師器、須恵器を主たる編年の基準とする。土師器は筆者の編年(重藤二〇〇七)を用いることとするが、蒲原宏行氏による古墳時代前期の土師器の時期区分(蒲原一九九二)、小松讓氏による古墳時代中期を中心とした唐津市梅白遺跡出土資料を基礎とした古墳時代中期土師器の編年(小松二〇〇三)、および『前方後円墳集成』における前方後円墳の編年区分との対応関係を示すと表1のようになる。須恵器については大阪府陶邑古窯跡群にお

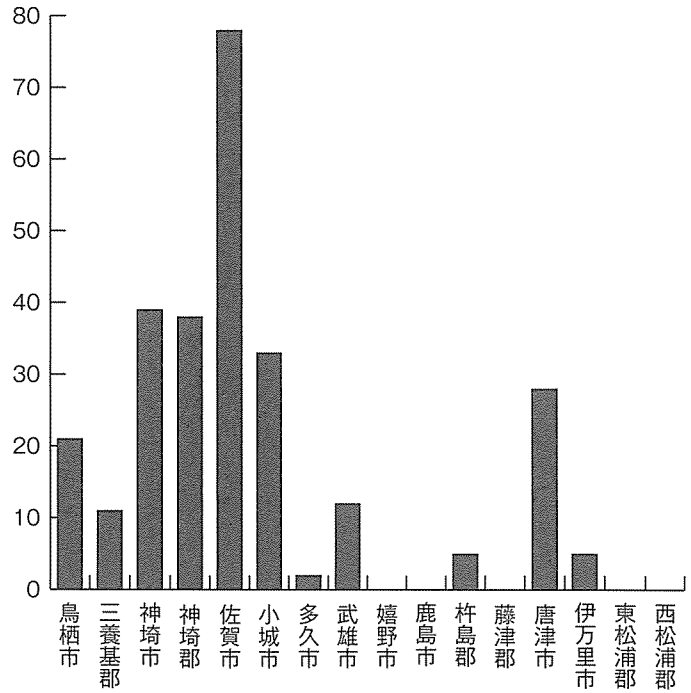


図2 分析の対象としたデータの地域別件数

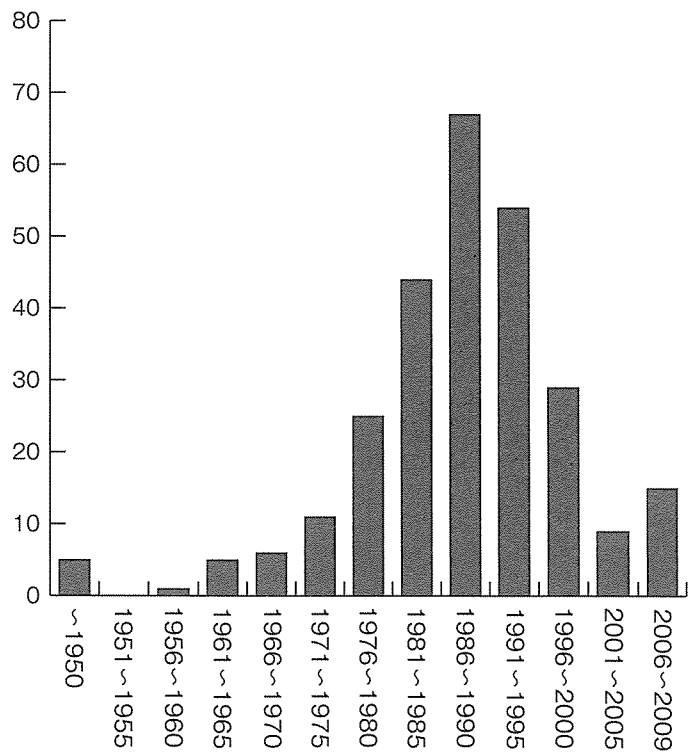


図3 報告書刊行年代別のデータ件数

ける編年（田辺一九八一）を用いることにした。

なお、本地域では、福岡県朝倉古窯跡群産と類似する初期須恵器も出土している。陶邑における須恵器編年と朝倉古窯跡群産の須恵器との関係は池ノ上Ⅰ～Ⅲ式（橋口一九八三）がおおよそTK七三～TK二一六型式に平行すると考えている。

（三）分析の対象としたデータとその概要

上記に該当する佐賀県内の古墳の埋葬施設で、発掘調査報告書が刊行され、その詳細を知ることができるものを対象にデータを収集することにした。その結果、管見に触れたものは二七二件となる。なお、一古墳に複数の埋葬施設が存在する場合は別個にカウントするとともに、明確な墳丘を

伴わなくても古墳時代と推定されるものについては対象とした。そのため、対象となった古墳数はこれより少なくなる。データはデータベースとして作成して分析を行うこととした。本稿では紙幅の関係で全てのデータのリストを掲示していないが、末尾に対象とした古墳の報告書を参考文献として示している。

筆者が確認することのできた報告書に依拠しているため、遺漏もあるかもしれない。また、データに地域的な偏りがあれば佐賀県地域全体の傾向を抽出できないおそれもある。後者の点について確認するため、市郡別に件数を示したものが図2である。これによれば、佐賀市内の事例が最も多く、神崎市、神埼郡、小城市がこれに次いでいる。また唐津市内もやや多い。これは開発の事前発掘調査の多寡と相関している可能性もあるが、一

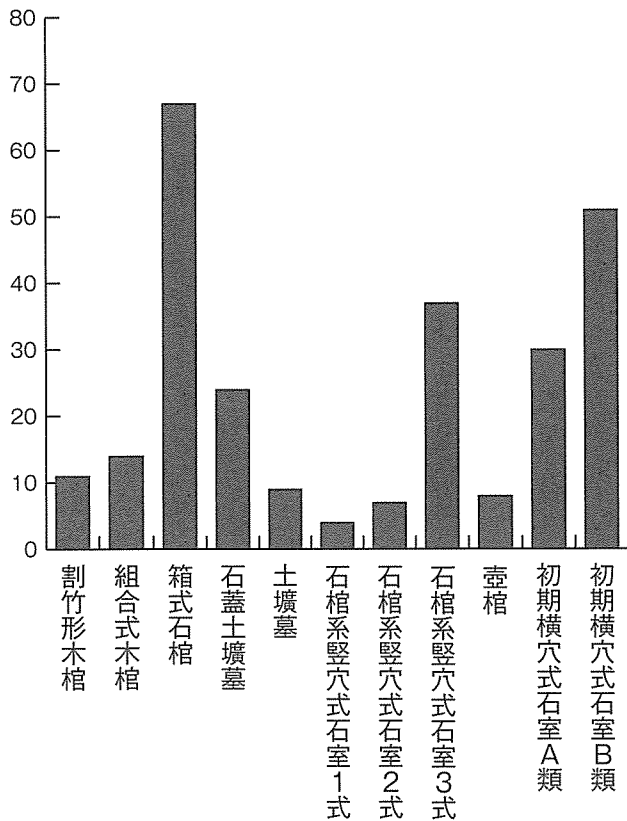


図4 主要な埋葬施設別のデータ件数

方ではこれらの地域は古墳時代の前方後円墳等首長墓の系列が明瞭である。これに対して佐賀県でも西部、多久市、鹿島市、嬉野市、杵島郡、東松浦郡、西松浦郡は首長墓系列が不明瞭であり、古墳そのものの数も多くない可能性が高い。したがって、収集したデータはおおよその佐賀県内の状況を把握できているのではないかと考えられる。

一方、データについて、報告書刊行年度別に示したのが図3である。これによれば、県及び市町村教育委員会による発掘調査体制の整備が進んだ一九七〇年代より増加傾向になり、一九八〇年代後半にピークを迎えた後、二〇〇一年以降になると急激に減少していることが判る。一九八〇年代の九州横断自動車道の建設等の大型開発によって調査された古墳が多い一方で、近年では大型開発の減少とともに古墳調査も少なくなっているという解釈できる。今後の調査、報告書の刊行によって大幅に件数が増加する可

能性は無いとは言えないが、現時点で検討することは、一九七〇年代以降の調査結果を総括することにもつながるのではないかと考えている。

これら二七二件のデータのうち、土器などが伴って時期決定が可能なものは限られる。古墳の墳丘、周溝、埋葬施設などからの出土土器により時期の決定が可能な埋葬施設は、一〇九例、全体の約四〇%程となる。本稿ではこれらに基づいて各種の埋葬施設の時期を推定することになる。半数には満たないが、おおよその傾向を把握することができるのではないかと考えている。なお、今後の副葬品のセット関係とその階層性の検討に備えて、攪乱の有無も確認した。それによれば、攪乱が少なく本来の副葬品の構成を検討することが可能なものは一一三例、約四二%にとどまる。本稿では埋葬施設と副葬品との関係は検討しないが、将来、副葬品の構成を検討する際には、これらの件数を対象にすることができるとも言える。

埋葬施設の種類別にみれば、図4のようになる。箱式石棺が六七件と最多であり、初期横穴式石室B類、石棺系竪穴式石室3式がこれに次ぐ。一方、土壙墓、石棺系竪穴式石室1式、同2式、壺棺は一〇例に満たない。

三、各埋葬施設の時期

埋葬施設の種類毎に出土した土器から時期決定ができるものについて、時期別の件数を示したのが、図5である。もちろん、全ての埋葬施設に土器が伴うものではないし、埋葬施設の種類によっては、事例数がさほど多くない場合もある。しかしながら、これにより、各埋葬施設の存続時間幅、最も活発に構築された時期や、埋葬施設の種類間の同時並存関係がうかがわれると思われる。

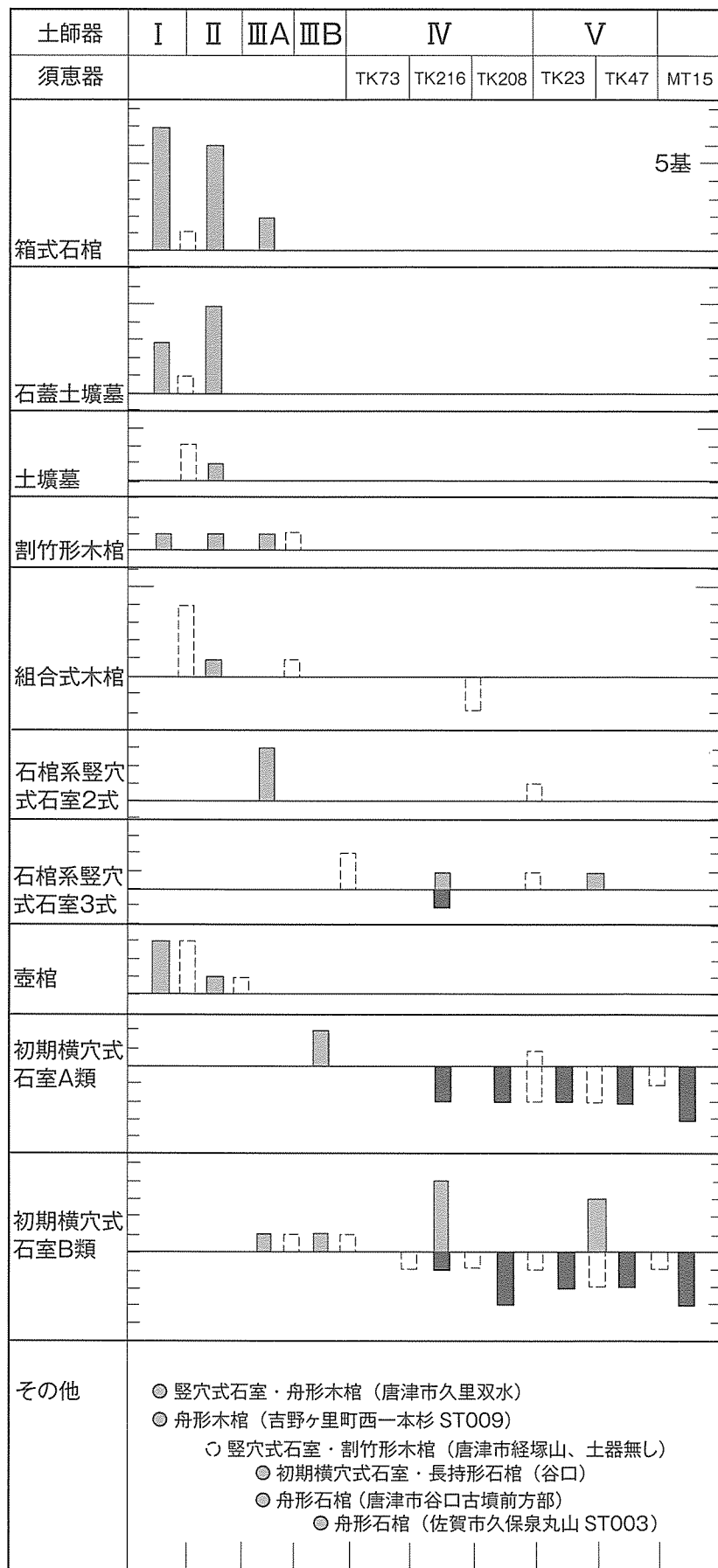


図5 埋葬施設の種類別の共伴土器の時期

(一) 箱式石棺

土師器Ⅰ・Ⅱ期に集中するが、確実に土師器Ⅲ期まで下る例として、唐津市双水柴山遺跡一号墳前方部石棺(中島編一九八七)、佐賀市藤附B遺跡ST〇〇一箱式石棺(東中川他編一九八〇)がある。土器が出土せず図5のカウントに含めていないが、佐賀市森ノ上古墳(松尾一九四九)では琴柱形石製品、堅櫛が副葬されていたので、やはり土師器Ⅲ期にまで下るものと考えられる。

(二) 石蓋土壙墓

出土土器から考えれば土師器Ⅰ・Ⅱ期に限られ、副葬品から考えても土師器Ⅲ期に下るものはない。ただ、筑前・筑後・豊前等の地域には土師器Ⅲ期に確実に降るものがあるので、下限については今後の資料の増加により修正が必要となるかもしれない。

(三) 土壙墓

例が少ないが、石蓋土壙墓と同様に土師器Ⅰ～Ⅱ期に集中している。

(四) 割竹形木棺

全長三五m程の小形の前方後円墳と推定される唐津市双水柴山遺跡二号墳一号主体部の事例が土師器Ⅰ期でもやや新しい時期に位置づけられ、土器を伴うものとしては本地域では最古である(中島編一九八七)。この他に土師器Ⅱ期の例として神崎市朝日北遺跡五区ST一―二号主体(高瀬他編一九九二)、土師器ⅢA期の例として三養基郡上峰町一本谷遺跡円形周溝墓(七田一九八三)がある。武雄市東福寺遺跡ST〇―一五北側主体部(徳永他編一九九四)は土師器ⅢA期かⅢB期か区別しがたい事例である。また、墳丘長約八〇mの前方後円墳、伊万里市空路寺古墳の後円部主体部は礫床を伴う割竹形木棺の可能性が高い(大塚他一九六二)。仿製三角縁神獸鏡を出土することから考えて、『前方後円墳集成』編年の三期に位置づけることが一般的である。

ところで、割竹形木棺の総数は時期の不詳のものも含めて一一例であり、二七二例中四・〇%にとどまる。これに対して、ほぼ同様の基準で資料を収集した筑前地域西部(糟屋郡南部・福岡市・旧筑紫郡・糸島市)では二一・〇%、筑前東部(糟屋郡東部より東の筑前)と豊前北部(福岡県域)では一〇・一%であり、肥前東部地域と比べると大きな差がある。一方、筑前南部(旧朝倉郡と筑紫野市南部)と筑後の地域では三・五%となり、肥前東部地域と類似した数字を示している。割竹形木棺は前方後円墳出現とともに近畿地域で定型化して、前方後円墳とともに九州に普及したと考えられる(吉留一九八九)。このような割竹形木棺の比率の違いは、前方後円墳をはじめとする古墳文化の広がりとの地域差を示しているとも解釈できる。ただ、筑前西部と筑前東部と豊前北部の地域ではⅢ期以降に下る割竹形木棺の例も多く、Ⅲ期における埋葬施設の地域差を大きく反映して

いる可能性もある。このような北部九州地域全体での埋葬施設の地域性とその時期毎の特質は、機会を改めて論ずることにしたい。

(五) 組合式木棺

時期の確定できないものが多いが、割竹形木棺と同様に、土師器Ⅰ・Ⅱ期に集中するようである。その中で東福寺遺跡ST〇―一五南側主体部(徳永編一九九四)は、土師器Ⅲ期の事例として注意される。また、南北に二基の組合式木棺をもつ三養基郡基山町大行事古墳(中牟田編一九七八)ではTK二一六とTK二〇八型式頃と推定される須恵器壺が出土している。古墳に確実に伴うと断定できないが、筑前地域でもこの時期まで下る事例があり、今後の類例の増加に注意しておきたい。

(六) 石棺系竪穴式石室

1式 佐賀市久保泉丸山遺跡ST〇〇六(東中川編一九八六)、鳥栖市所熊山古墳群ST〇〇二(湯浅二〇〇三)、佐賀市山王山古墳東西両石室(奥村他一九六八)の四例にとどまり、いずれも出土土器からの時期決定が困難である。しかし山王山古墳は方形鋤先、手鎌等が出土する点から土師器Ⅲ期のうちにおさまる。山王山古墳は直径約四〇mの円墳であり、舟形石棺を主体部とする直径約三〇mの円墳で前方後円墳編年三期後半から四期に推測される佐賀市熊本山古墳(木下他一九六七)に後続し、初期横穴式石室を主体部とする五本黒木丸山古墳(木下一九六三、蒲原他編一九八四)に先行する巨瀬川流域の首長墓と想定される(蒲原一九九五)。このような首長墓系列の想定と副葬品からの山王山古墳の時期の推定は矛盾しない。他の例も含めて、土師器Ⅲ期を中心とするものと考えておきたい。

2式 七例にとどまり事例は少ない。佐賀市久保泉丸山遺跡ST〇〇一（東中川編一九八六）、佐賀市藤附B遺跡ST〇〇一（東中川他編一九八〇）、佐賀市金立開拓遺跡ST〇三三（蒲原他編一九八四）でⅢA期にまで遡る可能性の高い土師器を伴っている。佐賀平野では凝灰岩製の板石を使用する例も多いため小口に板石を立てた石棺系竪穴式石室2式が石棺系竪穴式石室1式とほぼ同時期に出現したと考えている。ただ、佐賀市黒土原遺跡ST〇〇七ではⅣⅤ期と推定される土師器を伴っている（福田一九八七）。隣接する筑前南部～筑後地域では石棺系竪穴式石室2式は須恵器出現以降の例も多いので、中心は土師器Ⅲ期にあるとしても一部はそれ以降にまで下る可能性を想定しておきたい。

3式 Ⅳ期以降の土師器を伴うもの、TK七三型式以降の須恵器を伴うものが主体となっていて、後述する初期横穴式石室A類、初期横穴式石室B類と平行する時期の埋葬施設であることがわかる。このような点は隣接する筑前・筑後地域と共通する。ただ、ⅢB期かⅣ期か区別できない土師器を伴う例として、佐賀市大門西遺跡ST〇三五・同ST〇三八（東中川他編一九八〇）があり、他地域に比べてやや古い時期に属する。そのため、他地域では須恵器出現以降であるが、本地域ではそれよりもやや遡る時期に石棺系竪穴式石室3式が成立した可能性も考慮しておくことにしたい。

(七) 初期横穴式石室A類

筑肥型初期横穴式石室もここに含めた。図に示したように須恵器出現以降から増加するが、土師器ⅢB期の事例として唐津市横田下古墳（唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二）、佐賀市久保泉丸山遺跡ST〇〇二号墳（東中川編一九八六）がある。また、詳細なデータに接することができな

かったためデータベースの作成にいたっていないが、佐賀市五本黒木丸山古墳（木下一九六三、蒲原他編一九八四）は玄室方形プラン、穹窿天井の初期横穴式石室を主体部とし、割石小口積みで壁体を構築することからこれらと同時期の可能性が高い。

本地域の横穴式石室は、図5の欄外に示した唐津市谷口古墳東西石室が最古である（唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二）。仿製三角縁神獸鏡や石釧を伴うことから、『前方後円墳集成』編年四期でも古い段階と考えられ、墳丘から出土した土師器壺の時期とも矛盾しない。短壁の上部に開口部を設ける特殊な横口部や長持形石棺の設置は他に比較例がないが、石室平面規模は北部九州型初期横穴式石室A類とほぼ同大である。したがって、本地域では古墳時代中期初頭には大形の横穴式石室を築造する技術が出現し、早いうちに定着、完成したと推測される。

筑肥型初期横穴式石室、横口式家形石棺を納めた佐賀市西原古墳を含めて初期横穴式石室A類は二七二例中三〇例、全体の一一・〇%を占める。これに対して、筑前西部地域では八・三%、筑前南部～筑後地域は三・五%、筑前東部～豊前北部地域では五・九%にとどまり、佐賀県地域と比べると少ない。上述のように、佐賀県地域は初期横穴式石室の出現が先行するとともに、筑肥型石室の創出もあわせて古墳時代中期前半～中頃に活発に横穴式石室を受容した地域である。これにより、中期前半段階から初期横穴式石室の普及が進み、そのため数値が大きくなっているのではないかと考えられる。前述した割竹形木棺の比率とは正反対の地域性が指摘できる。これらの問題については、他地域のデータの充実、整備を図った上で、機会を改めて論ずることができればと考えている。

(八) 初期横穴式石室B類

全体的には須恵器出現以降、すなわち土師器編年Ⅳ期以降に事例が増加する。大形の初期横穴式石室A類とともに普及した過程を知ることができ、このような点は隣接する筑前、筑後地域と一致している。

ただ、土師器編年Ⅲ期に遡る例がいくつかある点がこの地域の特徴である。土師器ⅢA期に属するものとして、直径二三m程の円墳と考えられる唐津市双水柴山一号墳(中島編一九八七)の例がある。直径六m弱の円墳、佐賀市久保泉丸山遺跡ST〇一〇は土師器ⅢB期、墳丘規模不詳の久保泉丸山遺跡ST〇〇九は土師器ⅢBⅠ期頃の土器を少量ながら伴っていて、古墳群全体の展開から考えて大きな矛盾はない(東中川編一九八六)。佐賀市鈴熊遺跡ST〇〇四でも土師器小形丸底壺が出土しており、土師器ⅢB期にまで遡る可能性が高い(家田編一九九三)。筑前・筑後・豊前北部地域をみわたしても、土師器Ⅲ期にまで遡ると考えられる初期横穴式石室B類は福岡市南区老司古墳一・二・四号石室のみである(吉留他編一九八九)。肥前東部地域の上述した例は出土土器が少量で時期決定に若干の不安を残すが、前述した初期横穴式石室A類の普及過程も勘案するならば、大きな無理がないと思われる。

(九) その他

この他に事例数が少なく、図5の下方の欄外に示したものについて述べれば、竖穴式石室に舟形木棺を納めた久里双水古墳の出土土師器はⅠ期に位置づけられる(田島他編二〇〇九)。久里双水古墳の舟形木棺と同様の形態のものと推測されている神埼郡吉野ヶ里町西一本杉遺跡ST〇〇九でも古墳時代初頭、Ⅰ期の土師器を伴っているためこれと矛盾しない(東中

川他編一九八〇、岡田二〇〇九)。長持形石棺に類似する石棺をもつ和多田権現山古墳(唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二)は時期を決定する資料が無く、中期前半頃と推定するしかない。また、本地域で唯一の竖穴式石室に割竹形木棺を納めた唐津市経塚山古墳は時期を決定するための出土遺物が少ないが、唐津市谷口古墳に先行する前方後円墳編年三期と考えられる。舟形石棺は、佐賀市熊本山古墳(木下他一九六七)、佐賀市久保泉丸山ST〇〇三(東中川編一九八六)、唐津市谷口古墳前方部石棺(唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二)の例から、土師器ⅢA期ⅠⅡB期に中心があるものと考えておきたい。ただし、須恵器編年MT一五型式頃の築造と考えられる唐津市島田塚古墳(唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二)では横穴式石室玄室中に舟形石棺棺身が置かれている。舟形石棺が伴うとすれば、下限はもう少し広く考える必要もあるう。

四、首長墓と古墳群における埋葬施設の変遷

前章では古墳埋葬施設ごとに時期を確認してみたが、古墳時代中期、すなわち土師器Ⅲ期以降になると石棺系竖穴式石室や初期横穴式石室が登場し、急速に埋葬施設が変化することがわかる。これらは古墳の階層的な構成とも関係していると考えられる。そこで、古墳時代中期の首長墓級古墳における埋葬施設の展開をみておくことにしたい。

中期前半の首長墓級古墳の埋葬施設が判明している例は少ないが、全長七七mの前方後円墳である谷口古墳がある。また、直径二〇m以上の大形の円墳に範囲を広げると佐賀市熊本山古墳、佐賀市山王山古墳、佐賀市五本黒木丸山古墳、唐津市横田下古墳、唐津市双水柴山一号墳などで内容が

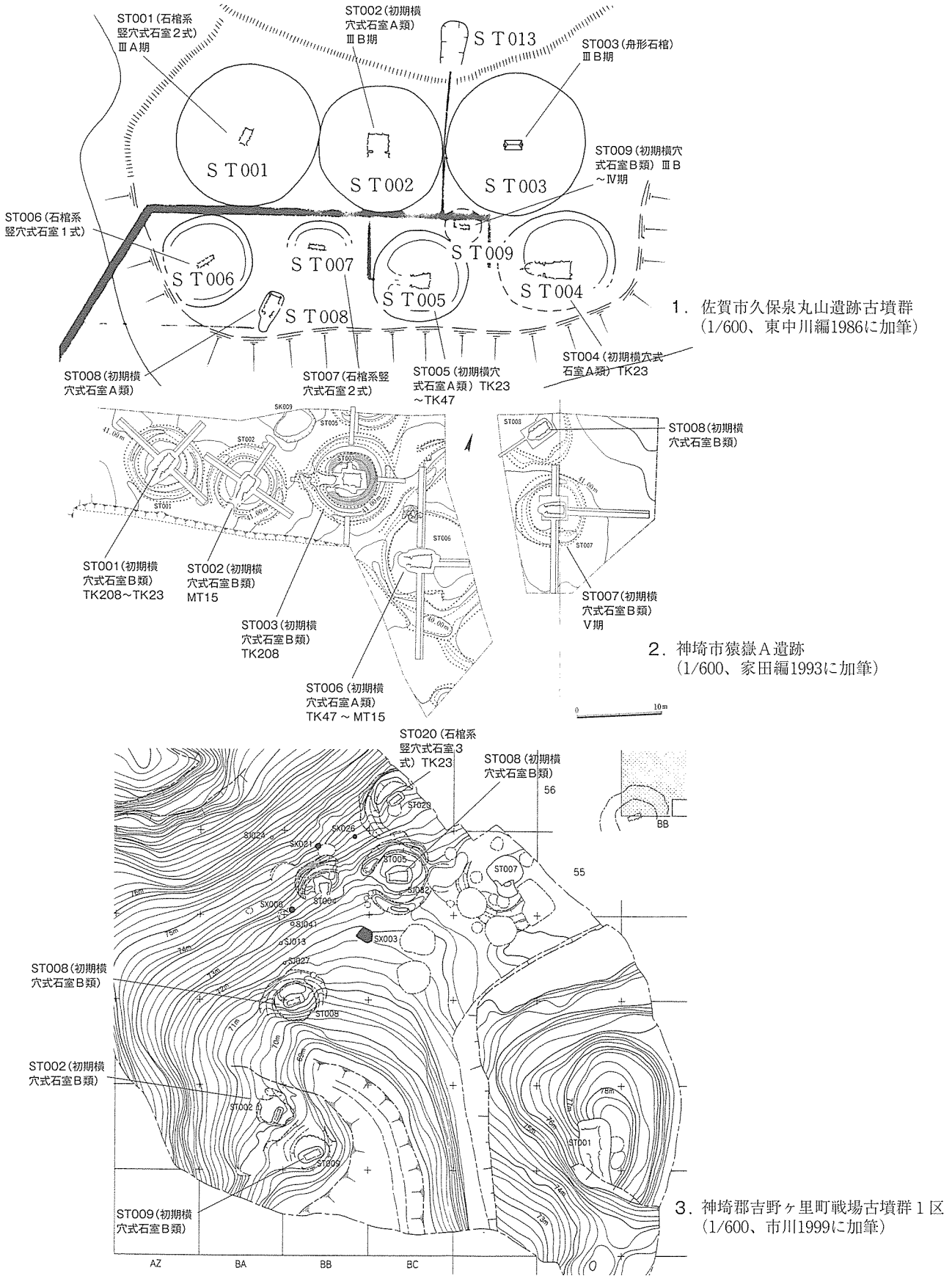


図6 古墳時代中期の中小規模の古墳から構成される古墳群の事例

知られている。これらの埋葬施設は、前章で触れたように初期横穴式石室、長持形石棺、舟形石棺、石棺系竪穴式石室である。古墳時代前期後半、すなわち『前方後円墳集成』編年三期の首長墓級の古墳では竪穴式石室に割竹形木棺を納めた塚塚山古墳、割竹形木棺と推測される李路寺古墳があるが、中期になると割竹形木棺が首長墓では採用されなくなり、新たな埋葬施設が登場したと推測される。

古墳時代中期後半の首長墓級の古墳の例では、全長五五mの前方後円墳である佐賀市関行丸古墳（渡辺他一九五七）、直径四八mの円墳の武雄市玉島古墳（木下一九七三）に初期横穴式石室A類が採用されている。全長五五mの前方後円墳、佐賀市西原古墳でも横穴式石室に石棺を納めたと推測される（松尾一九三六）。一方、直径四〇mの円墳、小城市小城円山古墳では玄室に石障を設置した筑肥型初期横穴式石室となっている（蒲原一九九八）。また、検討のための統計データには含まれていないが、目達原古墳群の首長墓でも初期横穴式石室が一般的であり（松尾一九五〇）、直径四〇mの円墳、佐賀市西隈古墳では初期横穴式石室A類に装飾を施した横口式家形石棺が納められている。したがって、首長墓級の埋葬施設では初期横穴式石室が主体を占めるようになる一方で、横穴式石室内部への横口式家形石棺や石障の設置により、首長墓と他の古墳との階層的格差を表現するようになったと考えられる。

このような首長墓級古墳の埋葬施設に対して、古墳時代中期の中小規模の円墳等から構成される古墳群の様相は、埋葬施設の地域的変遷を具体的に確認するために重要である。

佐賀市久保泉丸山遺跡（東中川編一九八六）では、ST〇〇一～〇〇九の九基の小古墳が古墳時代中期に属する（図6の1）。いずれも小形の古

墳で墳丘を伴わないものもあるが、このうち直径一四・一mのST〇〇一、直径一二・五mのST〇〇二、直径一三・九mのST〇〇三の三基の円墳が他よりも突出した規模にある。これら三基のうちⅢA期の土師器を伴い石棺系竪穴式石室2式を埋葬施設とするST〇〇一号墳が古墳群中でも最古段階のものと考えられる。筑肥型初期横穴式石室のST〇〇二と舟形石棺を納めたST〇〇三では出土土器等の遺物からの前後関係の決定は難しいが、報告書の指摘するとおり、ST〇〇二が先行すると考えておきたい。時期決定のための出土土器は不足しているが、これらの三基の大形の古墳と平行する時期に石棺系竪穴式石室1式のST〇〇六、石棺系竪穴式石室2式のST〇〇七が築造されたと考えられる。位置関係から考えて、ST〇〇一、ST〇〇二と階層的關係にあった可能性が高い。また、出土土器から土師器ⅢB期～Ⅳ期の間で区別しがたいST〇〇九もST〇〇三とはほぼ同時期で階層的に下位の古墳の埋葬施設と考えられる。このような構成は、佐賀平野の古墳時代中期前半の埋葬施設の典型的な階層性を示していると考えられる。一方、古墳群の南部に位置するST〇〇四、ST〇〇五、ST〇〇八はTK二三～TK四七型式の須恵器を出土するものもある。須恵器出現以降、すなわち中期後半に築造された一群と考えられる。土師器Ⅲ期すなわち中期前半には石棺系竪穴式石室を主体としながらも、階層的に上位の者が初期横穴式石室A類、舟形石棺を採用していたが、中期後半になると初期横穴式石室が主体となる過程を知ることができる。

図6の2に示した神崎市猿嶽A遺跡（家田編一九九三）は六基の古墳で埋葬施設の内容が判明している中期後半を中心とした時期の古墳群である。TK二〇八型式にはST〇〇一、ST〇〇三が該当し、いずれも初期横穴式石室B類を採用している。これに対してTK四七～MT一五型式の時期

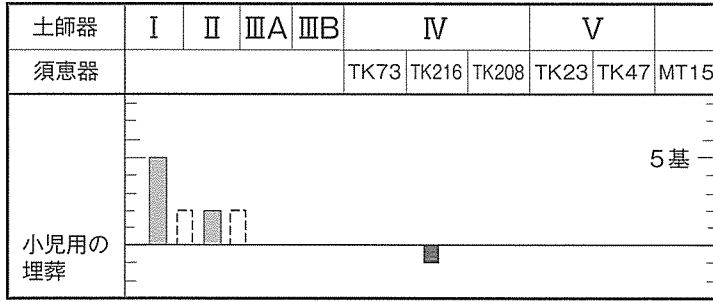


図8 小児用の埋葬施設の相伴土器の時期

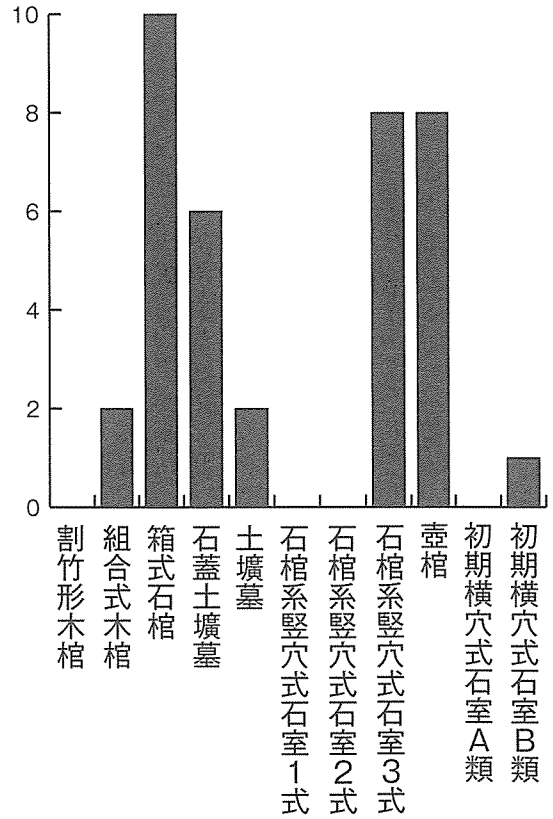


図7 小児用の埋葬施設の件

表2 副葬品を出土した小児用の埋葬施設

古墳名	所在地	埋葬施設型式	副葬品
滝A遺跡ST03	小城市	箱式石棺1式	滑石製勾玉2、滑石製白玉175、刀子1
鈴熊遺跡SC008	佐賀市	箱式石棺1式	ガラス小玉2点
猿嶽C・D遺跡ST015	神崎市	石棺系縦穴式石室3式	長頸鏃1

今回の検討では成人用の埋葬施設に加えて小児用の埋葬施設もデータを収集した。古墳時代において人骨の遺存から小児と判断できる例は少ないが、小児用の埋葬施設は成人用に比べて小形である。古墳時代は伸展葬が一般的であるので、成人の身長を一・五m以上と考えれば、石棺、木棺、土壙墓、石棺系石室等では一・五m未満を基準として小児用の埋葬施設を抽出することができる。実際は一・〇m余りのものが多く、発掘調査事例では明瞭に成人用埋葬施設と区別できる場合が多い。また、壺棺が八例含まれているが、弥生時代に見られる成人用壺棺には及ばない大きさで、やはり小児専用の埋葬と考えられる。

このような観点から小児用の埋葬施設を抽出した。その件数は合計三七例を数え、全体の約一四%を占めている。弥生時代の壺棺墓地における小

五、小児用埋葬施設について

になると、墳丘規模がやや大形のST〇〇六では初期横穴式石室A類が、墳丘規模の小さいST〇〇二号墳では初期横穴式石室B類が採用されている。墳丘規模の階層差との対応を知ることができる。

図6の3は神埼郡吉野ヶ里町戦場古墳群1区(市川一九九九)の古墳配置である。当古墳群では時期を示す土器の出土が不足している場合が多いが、初期横穴式石室B類を主体とする点から考えて、中期後半を中心にすると考えられる。その中で注目できるのは、TK二三型式の須恵器を伴うST〇二〇である。埋葬施設は石棺系縦穴式石室3式であり、初期横穴式石室B類と同時期に、石棺系縦穴式石室3式が存続していた可能性が高い。

児棺の構成比と比べると明らかに少ない。弥生時代と古墳時代の間で大きく小児の死亡率が減少したとは考えられないので、小児の中でも限定された人物のみが小児棺に埋葬された可能性が高い。また、その時期を示したものが図8である。土師器Ⅰ～Ⅱ期に集中するが、神埼郡吉野ヶ里町浦田古墳群二区ST〇二二では小児用石棺系縦穴式石室3式を埋葬施設とする古墳の周溝からTK二一六型式の須恵器が出土している(市川一九九九)。また、これらの埋葬施設の種類別にその数を示したものが図7である。石棺系縦穴式石室3式や初期横穴式石室B類の鳥栖市牛原前田遺跡二一区ST〇三(内野他一九九六)があるので、中期後半まで存在するものと考えられる。なお、北部九州地域全体を見れば、六世紀以降は小児専用の埋葬施設はほとんどみられなくなる。横穴式石室の普及により、小児は先行して死亡した家族を埋葬した横穴式石室に追葬されるようになり、小児専用の埋葬施設は不要になったものと考えられる。

図7と全体的な傾向を示した図4とを比べると、壺棺の割合が高いことが第一に注目される。そのほかに小児用の埋葬施設の特徴としては、石蓋土壙墓の割合が高いこと、割竹形木棺・石棺系縦穴式石室1式・石棺系縦穴式石室2式の事例が皆無であることが挙げられる。初期横穴式石室の例として、前述の牛原前田遺跡二一区ST〇三がある。玄室幅〇・八m、玄室長一・三mと極めて小形の玄室平面形で、北部九州の他地域でもほとんどみられない特殊な事例である。また、小児用の埋葬施設で副葬品を有するものについて抽出して示したものが表2である。これをみるとわずかに三例に過ぎず、攪乱を被るものが含まれるものの、成人用埋葬施設と比べると極めて副葬品が少ないと言える。鉄鏃を一点副葬した例があるが、鏡や刀剣を副葬した例は皆無である。ただ、その中で滑石製の玉類を多量に

副葬した小城市滝A遺跡ST〇三(高瀬編一九八九)の事例は際立っていて、特殊な祭祀的役割を担った小児が埋葬されたとも想像される。以上のような点から、小児用の埋葬施設の種類やその副葬品は一般の古墳埋葬施設とは階層差をもちながら選択されたと推測できよう。

なお、北部九州地域では小児用の古墳埋葬施設が目立つが、畿内などそれほど多くない地域もあるようである。小児用の埋葬施設の特殊な選択、それに関わる階層差の問題とともに、地域を広げて北部九州地域全体、あるいはそれ以外の地域との比較を通じてさらに解明を進める必要があると感じている。

六、おわりに

本稿では、肥前東部地域の古墳時代前期～中期における埋葬施設の変遷について検討を行った。古墳時代前期には割竹形木棺、組合式木棺とともに弥生時代以来の埋葬施設である箱式石棺、石蓋土壙墓、土壙墓も存在していることが分かった。これらの埋葬施設の一部は古墳時代中期にも存続する。しかし、古墳時代中期以降になると石棺系縦穴式石室、初期横穴式石室が主体となることが分かった。

このような変遷の過程は、古墳の階層差と関連するが、おおよその方向性は、隣接する筑前、筑後の地域と同様であることを示すことができた。ただ、肥前地域では古墳時代前期を中心とする割竹形木棺の普及の程度が、筑前東部～豊前北部、筑前西部地域と比べて低い一方で、古墳時代中期以降の初期横穴式石室では、筑前、筑後地域に先立って普及した可能性も指摘できた。このような点については、機会を改めて北部九州全体を総

合するように埋葬施設の地域性を検討することにした。

また、最後に小児墓の内容を検討してみた。その結果、古墳あるいは被葬者の社会的地位の階層性と相関しながら、小児の埋葬施設の型式が選択されていると推測された。全体的には、小児用の埋葬施設の割合は弥生時代の集団墓地における小児棺の割合と比べて、かなり低い。したがって、古墳に埋葬される小児は選択された人物であり、古墳時代の社会構成やそこにおける小児の位置づけを推測するひとつの手掛かりになると考えられる。このような小児用の埋葬施設はその有無、多寡も含めて、地域間で比較する必要がある、今後の検討課題とすることとしたい。

本稿の素案については、平成二二年三月に開催された二〇〇九年度「佐賀学」創成プロジェクト第五回公開研究会で発表したことがある。その際に、御教示をいただいた方々にお礼申し上げます。

また、本稿の作成に際して、次の方々に御教示をいただいた。記して感謝いたします。(敬称略、五十音順)

蒲原宏行 小松謙 辻田淳一郎 宮田浩之 柳沢一男

【引用文献(著者名五十音順)】

- 岡田裕之二〇〇九「久里双水古墳の墳丘形態と前期古墳の中の意義」田島龍太・宮本一夫編『久里双水古墳』唐津市文化財調査報告書第九五集
- 蒲原宏行一九九一「古墳時代初頭前後の土器編年―佐賀平野の場合―」『佐賀県立博物館・佐賀県立美術館調査研究書』第一六集
- 蒲原宏行一九九五「古墳と豪族―佐賀平野の首長墓―」小田富士雄編『風土記の考古学』五『肥前国風土記』の巻 同成社
- 小松謙一九九九「肥前東部地域の横穴式石室導入と展開および終末」『九州における

横穴式石室の導入と展開』第二回九州前方後円墳研究会発表資料集

小松謙二〇〇三「梅白遺跡出土土師器群の編年の位置づけ―梅白式の提唱―」小松謙編『梅白遺跡』佐賀県文化財調査報告書第一五四集

近藤義郎編一九九二『前方後円墳集成』九州編 山川出版社

重藤輝行・西健一郎一九九五「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性―東部の前期・中期古墳を例として―」『日本考古学』第二号

重藤輝行二〇〇七「埋葬施設―その変化と階層性・地域性―」『第一〇回九州前方後円墳研究会 九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会

重藤輝行二〇〇九「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『地域の考古学 佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』

田辺昭三一九八一『須恵器大成』角川書店

田平徳栄一九八九「佐賀平野における古墳時代前期の埋葬主体について」『老松山遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(一〇) 佐賀県文化財調査報告書第九二集

中間研志一九八六「竪穴式石室・石棺系竪穴式石室」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』六 中巻 福岡県教育委員会

橋口達也一九八三「北部九州における陶質土器と初期須恵器」橋口達也編『古寺墳墓群』II 甘木市文化財調査報告書第一五集

松尾禎作一九五〇『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告』第九輯 目達原古墳群調査報告

柳沢一男一九九三「横穴式石室の導入と系譜」『季刊考古学』第四五号 雄山閣

吉留秀敏・渡辺芳郎編一九八九『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第二〇九集

吉留秀敏一九九〇「北部九州の前期古墳と埋葬主体」『考古学研究』第三六巻第四号

吉留秀敏一九八九「九州の割竹形木棺」『古文化談叢』第二〇集(中)

鳥栖市

七田忠志・松尾禎作一九四九「BS旭自動車工場遺跡」『佐賀県史蹟名勝天然記念物』第八輯

木下之治一九七三『鳥栖市山浦古墳群』佐賀県文化財調査報告書第二二集

内野武史・石田玲子一九九六『牛原前田遺跡』II 鳥栖市文化財調査報告書第四八集

久山高史一九九七『立石地区遺跡群』鳥栖市文化財調査報告書第五三集（立石惣楽遺跡）

徳永禎紹・白木原宜・吉本健一・鹿田昌宏・田中大介二〇〇一『柚比遺跡群』一 第二分冊佐賀県文化財調査報告書第一四八集（平原遺跡八区ST8〇一一）
三養基郡

松尾禎作・七田忠志一九四九『東尾大塚古墳』『佐賀県史蹟名勝天然記念物』第八輯 佐賀県（みやき町東尾大塚古墳）

木下之治・天本洋一編一九七四『姫方遺跡』佐賀県文化財調査報告書第三〇集（みやき町雌塚古墳・雄塚古墳）

中牟田賢治編一九七八『千塔山遺跡』基山町遺跡発掘調査団（基山町大行神古墳、基山町千塔山一号墳）

枉一義編一九八一『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（二）佐賀県文化財調査報告書第五七集（みやき町香田遺跡）

七田忠昭一九八三『一本谷遺跡』上峰村教育委員会
七田忠昭一九八三『船石遺跡』上峰村教育委員会

神埼市
八尋実一九八七『横山遺跡』神埼町文化財調査報告書第一五集

高瀬哲郎・百崎正子・中摩由香編一九九二『朝日北遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（一五）佐賀県文化財調査報告書第一一〇集（朝日北遺跡）

家田淳一編一九九三『切畑遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（二六）佐賀県文化財調査報告書第一一六集（切畑遺跡、猿嶽A遺跡、猿嶽C・D遺跡）

神埼郡
東中川忠美編一九八三『西原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（三）佐賀県文化財調査報告書第六六集（吉野ヶ里町西一本杉遺跡）

立石泰久編一九九〇『西石動遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（一）佐賀県文化財調査報告書第九七集（吉野ヶ里町山古賀遺跡）

市川浩文一九九九『戦場古墳群』佐賀県文化財調査報告書第一四〇集（吉野ヶ里町戦場古墳群、吉野ヶ里町浦田古墳群）

佐賀市
松尾禎作一九三六『埴輪圓筒を繞らせる西原古墳』『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯

松尾禎作一九四九『森上古墳』『佐賀県史蹟名勝天然記念物』第八輯

渡辺正気他一九五七『佐賀市関行丸古墳』佐賀県文化財調査報告書第七集
木下之治一九六三『佐賀市金立町丸山古墳』『新郷土』昭和三八年四月号 新郷土刊行会（五本黒木丸山古墳）

木下之治・小田富士雄一九六七『熊本山船型石棺墓』『佐賀県文化財調査報告書第一六集』佐賀県教育委員会（熊本山古墳）

奥村弘・宝蔵寺博一九六八『山王山古墳』佐賀大学考古学研究会

東中川新子・高瀬哲郎・中島直幸編一九八〇『大門西遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（一）佐賀県文化財調査報告書第五一集（大門西遺跡、藤附B遺跡、藤附C遺跡、藤附E遺跡）

枉一義編一九八一『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（二）佐賀県文化財調査報告書第五七集（藤附A遺跡、藤附K遺跡、藤附E遺跡、三郎山遺跡）

東中川忠美編一九八三『西原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（三）佐賀県文化財調査報告書第六六集（西原遺跡）

蒲原宏行・多々良友博・森田孝志・友貞菜穂子・矢野佳代子・堤圭子編一九八四『金立開拓遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（四）佐賀県文化財調査報告書第七七集（五本黒木丸山古墳、金立開拓遺跡）

東中川忠美編一九八六『久保泉丸山遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（五）佐賀県文化財調査報告書第八四集

福田義彦一九八七『黒土原遺跡』佐賀市文化財調査報告書第一九集

田平徳栄編一九八九『礫石遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書（九）佐賀県文化財調査報告書第九一集（佐賀市久池井一本松遺跡）

家田淳一編一九九三『切畑遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（二六）佐賀県文化財調査報告書第一一六集（鈴熊遺跡）

古賀章彦一九九六『藤附遺跡一区・大塚遺跡一区・大日遺跡二区』佐賀市文化財調査報告書第六六集

前田達男・楠本正士・中野充一九九七『西千布遺跡二区七区・友貞遺跡七・一二区』佐賀市文化財調査報告書第八〇集

木島慎治・前田達男二〇〇〇『古村遺跡四区』佐賀市文化財調査報告書第一一七集

小城市

高瀬哲郎編一九八九『老松山遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書
 (一〇) 佐賀県文化財調査報告書第九二集(織島西分古墳群、滝C遺跡、滝A遺跡、寺
 浦遺跡、寄居遺跡)

蒲原宏行一九九八『織島西分遺跡群』三月月町文化財調査報告書第三集(小城円山古
 墳)

古庄秀樹二〇〇〇『茶筌塚古墳の調査』『小城町立歴史資料館・小城町立中林梧竹記
 念館調査研究報告書』第一集

太田正和・永田稲男二〇〇六『織島東分下遺跡』小城市文化財調査報告書第一集
 木下巧一九七一『一本松古墳群調査概報―第二次発掘調査―』小城市教育委員会

多久市

西村隆司編一九八七『撰分遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書
 (七) 佐賀県文化財調査報告書第八七集

武雄市

木下之治一九七三『武雄市玉島古墳』武雄市教育委員会

木下之治一九七五『潮見古墳』武雄市教育委員会(丸山古墳、白岩山古墳)

原田保則一九八〇『矢ノ浦遺跡』武雄市文化財調査報告書第八集

原田保則二〇〇一『武雄市内遺跡発掘調査報告書(平成三年度―一―年度)』武雄市
 文化財調査報告書第四一集(草場遺跡)

杵島郡

木下之治一九六八『龍王崎古墳群』佐賀県文化財調査報告書第一七集(白石町龍王崎
 古墳群)

唐津市

松尾禎作一九五一『横田下古墳』『佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告』第一〇輯
 田平徳榮・蒲原宏行編一九八〇『経塚山古墳』浜玉町文化財調査報告書第一集

唐津湾周辺遺跡調査委員会編一九八二『末盧国』六興出版(谷口古墳、横田下古墳、
 樋ノ口古墳、迫頭古墳群、長崎山古墳群、和多田権現山古墳、神集島学校東二号墳、
 島田塚古墳)

中島直幸編一九八七『双水柴山遺跡』唐津市文化財調査報告第二〇集

岩尾峯希二〇〇一『衣干古墳群』唐津市文化財調査報告書第九〇集

草場誠司二〇〇三『鶏ノ尾遺跡』(二) 唐津市文化財調査報告書第一〇九集

小松讓編二〇〇六『大江前遺跡』西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書(三)

佐賀県文化財調査報告書第一六七集(目貫古墳群)

田島龍太・宮本一夫編二〇〇九『久里双水古墳』唐津市文化財調査報告書九五集

伊万里市

大塚初重・小林三郎一九六二『佐賀県杵路寺古墳』『考古学集刊』第一卷第四冊

(佐賀大学地域学歴史文化研究センター併任(文化教育学部)講師)